
天之女神-討魔伝記～BASTAR・闇を狩る者～

水樹ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天之女神 - 討魔伝記 - B A S T A R ・ 闇を狩る者 -

【Nコード】

N 2 9 7 1 Z

【作者名】

水樹ヒロ

【あらすじ】

滅亡寸前の世界に現れた赤衣着物の少女…。

その手には、意思を持つ一振りの剣があった。

突如として現れた謎の生物【クリーチャー】を相手に、少女は今日も戦場を赤く染める…。

紅い着物の少女

時は、西暦2015年9月。

日本から南極の調査に来ていた、とある大学の一団が謎の微生物を発見した。

一団は凍眠状態だったその未知なる微生物を調査する事に決定。

世界中の有名大学や各国の研究機関も南極へ向かい、合同調査が開始された。

西暦2016年11月。

東京近郊で、正体不明の化け物を目撃する事件が発生。

警視庁と防衛庁が合同で調査隊を派遣するも、原因は不明。

同時期：謎の微生物を研究していた南極調査隊や研究員らが突然、消息を絶つ。

西暦2017年2月。

世界各地に人型の化け物が一斉に姿を現した。

国連は異常事態宣言を発令。化け物を【クリーチャー】と呼称し、各国の軍隊がクリーチャーの掃討に乗り出した。

しかし…異常なまでの高い繁殖能力を持つクリーチャーに手も足も出ず、半年で発展途上国は壊滅。

先進国の各国も、自国を必死に死守していた。

西暦2019年6月。

アメリカ・ロシア・ヨーロッパ・中国そして、日本を残し…世界の各国は全て壊滅的被害を受けていた。

国連は、対クリーチャー特殊戦術部隊【BASTAR】を設立。

イギリスへ本部を…そして日本へはその支部を設立した。

それと同時期、対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】の開発を開始。

西暦2020年4月…。

対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】が完成。

クリーチャー迎撃の最前線基地である日本のBASTAR支部【グラスハイム】へと移送した。

そして…クリーチャーへの反撃を開始すると、BASTAR本部【Noa】は残存する各国へ声明を発表。

そして…現在。

西暦2020年10月…。

東京・渋谷駅前。

…ザンツ！

ボロボロのアスファルトに突き刺さる一振りの剣…。

クリーチャーの死骸が辺り一面に横たわっている中心に、一人の少女が立っていた。

返り血を浴びた顔…そして、血のように真っ赤な衣を纏った少女の名は、【井上瑠奈】…。

瑠奈は剣の柄を掴むと…引き抜いて鞘に納め、バス停のベンチに座った。

「あの賑やかだった渋谷も、今やクリーチャーの巣窟か。」

ババババ…

瑠奈が空を見上げると、輸送ヘリがゆっくり降下してきた。

「お迎えが来たみたいね…帰りましょうか。」

「…お疲れ様でした、井上隊長。」

ヘリから降りてきた隊員が、瑠奈に語りかける。

「お疲れ様。」

瑠奈は椅子に座ると剣を鞘から抜いて、刃の手入れを始めた。

「【赤き疾風】井上瑠奈。十八歳の若さで、日本支部で一番のクリーチャー掃討数を誇るエース。」

「ん?…」

瑠奈が顔を上げると、アメリカ人の少女が笑顔で立っていた。

「封魔の使い手に任命され、BASTAR第一戦闘部隊【α】の部隊長となったつ。」

「リイナ、お世辞は止めなさい。」

「はあい。」

リイナと呼ばれた少女は瑠奈の隣に座り、刀を見つめた。

「最初：対クリーチャー用白兵戦兵器って聞いて、どんなに凄い兵器かと思いきや。」

「見た目は普通の刀ですな。」

一般隊員が取っ手を掴んで、バランスを取りながら封魔を見つめた。

「封魔、調子はどう?」

瑠奈が語りかけると、封魔の柄にある宝玉が光り輝いた。

『非常に良好です。』

「そう。」

瑠奈は封魔を見つめ、初めて微笑んだ。

「先輩は本当凄いですよねえ?」

「何を言っているの。五歳でアインシュタインの方程式を解いたIQ250の奇才リイナ・カーディガル。貴女の方が凄いわ。」

「たまたまですっ、たまたま。」

瑠奈とリイナが会話していると、ヘリに通信が入った。

《こちら、BASTAR日本支部グラスハイム…どちらの部隊か？》

「こちら、クリーチャーの掃討に出ていたα部隊。ヘリポートへの着陸許可を。」

《了解。三番ヘリポートを利用して下さい。》

「着いたみたいですね？」

「そうね。」

瑠奈が窓から外を見ると、巨大なビルが立っていた。

旧サンシャインシティ及びその一帯を改築したBASTAR日本支部、通称【グラスハイム】のメインビルである。

「ようやく、一息つけるか…。」

「先輩？」

「ん？…なんでもないわ、それよりベルト締めなさい？着陸するわよ。」

「はあい！」

ヘリがヘリポートに着陸した後、瑠奈が降りるとリイナが追いかけてきた。

「先輩はこのまま、司令の所へ報告に向かいますよね？」

「ええ。」

「わかりました。先に、隊のオフィスへ戻ってます。」

「そうして?...うるさい馬鹿の相手、頼むわ？」

「了解ですっ！」

瑠奈はグラスハイムのメインビルに入ると、エレベーターで最上階に向かった。

瑠奈は顔をハンカチで拭きながら廊下を歩いていくと、支部長の部屋の脇にある司令官室の前で立ち止まった。

「α部隊所属...井上瑠奈です。入ります。」

瑠奈が室内へ入ると...窓から外を眺めていた、中年のイギリス人男性が振り返った。

「瑠奈...帰ったか。」

「はっ、クリーチャーの掃討完了しました...バラン・シュノーケル司令官。」

「ふっ...相変わらず、真面目だな？」

balanと呼ばれる男は瑠奈に振り返ると、彼女の顔を見つめ微笑んだ。

「だいぶ返り血で汚れたな？…その綺麗な顔が台無しだ。」

「構いません…容姿など気にしては、戦いは出来ませんから。」

「そうか…。」

balanはソファーに座ると、瑠奈を向かい側に座らせて目の前のテーブルに書類を置いた。

「これは…？」

「次の作戦に関してだ。」

「…。」

「帰還してすぐに申し訳ないが、今度は京都へ向かってほしい。」

「京都…？」

瑠奈は書類を手に取り、目を通した。

「京都祇園のクリチャー掃討作戦…。」

「そうだ。現在の自衛隊は今までの激戦で疲弊しており、部隊の再編成に集中させてやりたいのだ。」

「それまでの時間稼ぎ…ですか。」

「自衛隊の再編が完了すれば、戦いもだいぶ楽になる。それまでは、何とか我々だけで頑張るしかないのだ。」

「了解しました。では、13:30時にグラスハイムを発ちます。」

「すまんが、よろしく頼む。」

瑠奈が立ち上がり、部屋を出ようとした時… バランが語りかけた。

「…瑠奈。」

「はい。」

「帰って来た時くらい、肩の力を抜いてはどうだ？」

「…抜いています。」

そう呟くと… 瑠奈は静かに部屋を去った。

「感情を殺し、クリーチャーへの復讐に燃える戦鬼か。」

バランはソファアに寄りかかると、ジツと天井を見つめた。

「…無理もないわい。あんな事件があれば、誰しもああなろう。」

バランが振り向くと、日本人の老人が歩いてきた。

「黒田健一郎支部長…。」

「瑠奈はクリーチャーの日本侵攻時、激戦区だった千葉に住んでいた。」

「あの事件が無ければ…彼女が人間としての感情を失う事もなかったろうに。」

「うむ、可哀想な娘じゃて…。」

エレベーターで降りる瑠奈。

『瑠奈、体力回復を優先しましょう。』

「ええ、ちょっと疲れた。」

瑠奈はエレベーターを降りると、更衣室へ向かい…着物を脱いで、シャワーを浴びる事にした。シャワーを浴びた瑠奈が髪を乾かしていると…一人の女性隊員が歩いて来た。

「あら、まだ生きてたの？」

「…それは、こっちの台詞。」

微笑みながら俯く女性隊員。

「相変わらずね。ま、無事で良かったわ？」

「当たり前。」

瑠奈はバスタオルを彼女に被せ、自分のロッカーに向かった。

「全く…少しは愛想良くできない？」

「私なりにしてるつもりよ…。」

苦笑いしながら歩み寄ると、女性隊員は瑠奈の頭にバスタオルを被せた。

「仕方ない娘ね？…そんなんじゃ、男も寄ってこないわよ？」

「恋愛なんか…興味ない。」

瑠奈はB A S T A Rの制服に着替えると、着物と帯を手にとって口ツカーを閉めた。

「感情や思いだけじゃ…誰も救えやしない。」

「瑠奈…。」

「私は…力が欲しい。クリーチャーを皆殺しにする力が…。」

「…。」

「…じゃあ、失礼するわ。」

「瑠奈っ！」

女性隊員が去ろうとした瑠奈を呼び止めると、歩み寄った。

「…何？」

「貴女は一人じゃない…それだけは、分かって。」

「…。」

瑠奈は俯くと…振り返って静かに去っていった。

「シグナル隊長。」

女性隊員に他の隊員が話しかける。

「何？」

「井上隊長って、愛想ないですよねぇ？」

シグナルと呼ばれたその女性隊員は、彼女の発言を聞くと静かに俯いた。

「事の詳細を知らない貴女達には、そう見えても仕方ないか。」

「シグナル隊長？」

「なんでもないわ？気にしないで。」

「は…はあ…。」

女性隊員達が首を傾げるなか、シグナルもまた更衣室を後にした。

『瑠奈。』

「何？封魔。」

『α隊オフィス内から少量の火薬を確認しました。恐らく…。』

「はぁ…また、あの馬鹿か。」

瑠奈が頭をかきながらオフィスに入ると…イヤホンを付けたアメリカ人の男性隊員が、椅子に座りながら机上へ足を置き…何かの曲を聴いていた。

「フンフン！オツ、イエ…イ!？」

男性隊員の首元に、封魔の刃が不気味に光る。

「この前、オフィス内で武器の解体はするな…と言った筈よね、レオン？」

「る、瑠奈…！ちよっ！わ…忘れてたわけじゃ。」

「レオン・ハイフォード上級戦闘員…上官をファーストネームで呼ぶの？」

「ひいっ！井上隊長、ごめんなさいっ！」

「分かれば良いの。」

封魔を鞘に戻すと、瑠奈は隊長席へ座った。リイナが笑顔で席を立ててカップにコーヒーを注ぐなか、瑠奈は次の作戦の説明を始めた。

「全員…13:30時になったら、ヘリポート入口に集合。」

「もう次の任務ですか？先輩。」

「ええ。」

「今度はどちらに？」

「京都へ向かう。」

「京都？」

「そう…自衛隊再編の時間稼ぎも兼ねた、クリーチャー討伐作戦よ。」

「先輩…ひとまずコーヒーでも飲んで、ゆっくりして下さい？」

「ありがとう、リイナ。」

リイナが瑠奈へコーヒーを手渡すと、レオンが羨ましそうに見ていた。

「リイナちゃんっ、俺のは？」

「自分でやってっ！」

「ちえっ！…ん？そっいゃ、あのぜい肉君はどうした？」

レオンが室内を見渡すと、リイナが答えた。

「ウィン・リイ下級戦闘員？そっいえば、私も見てない。」

「まったくよお！大事なミーティングの時間にどこ行ってんだあ？あいつ。」

「その【大事なミーティングの時間】に、机の上へ卑猥な本を広げてるのは、何処のどなたかしら？」

「あつ！やべっ！」

コーヒーを飲みながら瑠奈が呟くと、レオンは慌てて本を机の引き出しにしまった。

「思春期の学生じゃあるまいし…。」

リイナが呆れた口調で言いながら、冷たい視線をレオンに送る。

「あんまり酷いと、リイナの教育に悪いし…セクハラで訴えようかしら？」

「か、勘弁っ！」

「リイナ…ウインには、今話した件を伝えておいて？多分、ヘリポートでヘリの整備をしてくれてるんでしょう。」

「はいっ！」

「じゃ、時間はあまり無いから解散。昼休み後、ヘリポート入口に集合…良いわね？」

「了解ですっ。」

「へいへい。」

「…じゃあ、また後で。」

「じゃあ瑠奈、俺と一緒に飯を食いに…」

レオンが笑顔で食事を誘うも…瑠奈は完全に無視して、オフィスから出ていった。

「無視…。」

「当然！先輩があんたみたいなのと行くもんですかつ！」

「けっ！……リイナ、一緒に飯…。」

「断じて、行かないっ！！」

宿舍の自室へ帰り、外の景色を眺める瑠奈。

『瑠奈。昼食摂取によるエネルギー回復を。』

「分かってる。」

ベッドの上に着物を投げて、部屋を出ようとした瑠奈は…ふと机にある写真を見つめた。

そこには…二人の友人と一緒に笑顔で写っている自分の姿があった。

「…佳苗。」写真立てを手に取り…懐かしそうに見つめる瑠奈。

「!?!」

その時…彼女の脳裏に、映像が浮かんだ。

高校の制服を赤く染めた瑠奈が腰を抜かして座り込む目の前で、友達たちがクリーチャーに追い詰められている。

「た、助けて…。」

「や…やめて。」

瑠奈は震えながら必死に懇願するも…クリーチャーは怯える友人に向かつて、一斉に噛みついていった。

「うあああつ!?!」

「!?!だあつ!」

『瑠奈!?!』

瑠奈は自室の入口に頭を打ち、現実に戻ると…額から血が流れてきた。

『また…いつものですか?』

「くっ!?!大丈夫、行きましょう。」

瑠奈は額をハンカチで押さえると、止血しながら自室を去っていった。

「近頃、また頻繁にアレを見るようになった…何故？」

昼食後…。

ヘリポートに集まるα部隊のメンバー。

瑠奈も衣に着替えると封魔を腰に差し、ヘリポートへ向かった。

「…お！来た来た、我らが隊長さんが！」

肩に自動小銃を担ぎ、レオンが冷やかす。

「隊長っ！ヘリの整備で時間忘れてたッス！」

小太りの少年が慌てて瑠奈の前に立つや敬礼した。

「ウィン…次からは気をつけなさい。」

「はいッス！」

「リイナ、ヘリ内でブリーフィングをしたいんだけど。」

「そうだと思つて、先程…管制室のレイチエル管制官から作戦内容のデータをいただいてきました！」

「ありがとうございます…じゃあ、行きましようか。」

「了解ッス！」

ウィンが走っていき、ヘリの運転席に座るとエンジンを起動させた。

プロペラが回り、風が吹き荒れる。

「行くわよ。」

瑠奈が衣をなびかせながら歩いていく。

「待ってくださいーい！」

リイナも走って瑠奈の後についていく。

「へいへい…んじゃま、行きますかねっ！」

レオンも走って乗り込むと…ヘリの後部ハッチが閉まり、ゆっくり上昇していった。

西の京都へ向かって飛んでいくヘリの中…。

リイナが京都周辺の地図を広げ、自分のミニパソコンを立ち上げた。

「今回の作戦は、京都祇園に潜伏しているクリーチャーの排除です。」

「祇園かあ…観光で一度【ゲイシャ】ってのを見に、行ったことあるな。」

「レオン、黙りなさい…続けて。」

「ちえっ。」

「はい！クリーチャーは八坂神社から花見小路・新橋通など…広い範囲に分散しています。先輩とレオンは京都の上空へ到達次第降下…直ちに排除を開始して下さい。」「了解だ…おい、ぜい肉君っ！京都まで、あとどんくらいだ？」

「あと一時間ちよつとツス…それから、その呼び名は止めてほしいツス！」

「なんだよ？嫌なのか？」

レオンはウインの頭を後ろから掴むと、ニヤニヤしながら問いかけた。

「瑠奈さんの前で、ぜい肉ぜい肉って言ってほしくないんす！」

「ん？そっぴや、お前…瑠奈に気があんだっけ？」

「…呼んだ？」

レオンとウインの後ろへ、瑠奈が首を傾げながら歩み寄ると…ウインの顔が真っ赤になった。

「い、いえっ！！なんでもないツス！」

「…お前、絶対マゾッ気あんだろ。」

「ウイン、京都上空に到達次第…後部ハッチを開放して。」

「りょ…了解ツス！」

「レオン？作戦前よ…ふざけてないで、集中。」

「へえへえ！」

へりが西へ向かう事、一時間…。

「うん…先輩、京都上空へ間もなく到達します！」

「了解…アシスト頼むわ？」

「お任せ下さいっ！」

「んっ…行くわよ？封魔。」

瑠奈が語りかけると、封魔の柄にある宝玉が光り輝いた。

『全システムのチェック完了。問題ありません。』

「了解。」

瑠奈はパラシュートを背負い、後部ハッチから飛び降りると…地上へ一直線に降下していった。

「隊長さんつてば、張り切っちゃってよお？」

「レオン、後続！ぐだくだ言わないっ！」

「あいよ。じゃあ…行ってきますかねえっ！」

レオンも後部ハッチから飛び降りると…リイナとウィンが乗ってい

るへりは、ハッチを閉めて京都上空をゆっくり旋回し始めた。

「クリーチャー・リーダーCR、オンつと…先輩、無線聞こえますかっ！」

降下中の瑠奈にリイナが無線を飛ばす。

「…聞こえてるわ。」

パラシュートを開いてゆっくり降下していた瑠奈は、付けていたイヤホンマイクでリイナに返事をした。

《先輩の真下…二時の方向に、クリーチャー反応が三体あります。》

「了解。」

《瑠奈。離れて降下すんのか？》

「…あんたには、近くにいてほしくないからね。」

《ひ、ひでえ…。》

《あははっ！…では、御武運をつ！》

瑠奈は八坂神社の境内前に降下すると、パラシュートを外した。

「レオン…あんたは花見小路方面からクリーチャーを排除しつつ、こちらに向かいなさい。」

《あゝいよっ！》

「…何、ふて腐れてるのよ。」

首を傾げると、瑠奈はゆっくり歩きだした。瑠奈が参道を歩いていくと…辺りに風が吹き出し、境内周辺の木々が風になびいた。

「…。」

鞘に手をやり、親指で封魔を押し出す瑠奈。

「…グアアアッ！」

すると…木の上から現れた一体のクリーチャーが、瑠奈へ襲い掛かった。

「…はっ！」

瑠奈が抜刀斬りで飛び掛かってきたクリーチャーを両断すると…目の前の鳥居の先にある階段から、二体のクリーチャーが涎を垂らしながら歩いてきた。

「クリーチャーは…。」

風に髪をなびかせながら、封魔を横に振って静かに握り直す瑠奈…。

「…皆殺した。」

瑠奈が封魔を握って呟くと…クリーチャーは彼女へ一斉に襲い掛かった。

「はああ！」

瑠奈が封魔を勢いよく振るった瞬間…木々に隠れていたカラスの群れが、鳴きながら一斉に飛び立った。

カア！カア！

カラスの鳴き声が響くなか…無惨に転がるクリーチャーの死骸。

刃についた血を払い落とし…瑠奈は封魔を鞘に納めると、参道を再び歩いていった。

「ん？」

瑠奈がふと空を見上げると…ポツポツと雨が降りだした。

「雨か…ん？」

瑠奈は道沿いに壊れた売店を見つけると、歩いて行って和傘を手にとった。

「すみません…傘を一本、お借りします。」

瑠奈は壊れた売店に頭を下げ、和傘を開くと…八坂神社を後にした。

「封魔、クリーチャー反応は？」

『現在、周囲に反応はありません。引き続き、警戒します。』

「お願い。」

瑠奈は雨の中、和傘をさして歩いていくと…遠くで銃撃音が聞こえた。

「あの音…今日は、まともに仕事しているみたいね。」

「…ぬわぁっ！」

瑠奈が振り向くと…レオンが血相を変えて、路地から走って来た。

「レオンッ！？」

「瑠奈っ！」

レオンが瑠奈を見て、笑顔で叫ぶと…背後から二体のクリーチャーが彼目掛け飛び掛かった。

「…！レオン、しゃがみなさい！」

「はっ！？わ…分かったっ！」

レオンの背中に飛び乗り、封魔を抜く瑠奈。

「うおっ！…ん？こりゃあ。」

「今、上を見たら…あんたの大切なところ、切り刻むわよ。」

「け、決して見ません…。」

「はぁぁっ！」

瑠奈はレオンを踏み台にして飛び上がると…一体のクリーチャーの顔面に蹴りを放った後、もう一体のクリーチャーへ廻し蹴りを放った。瑠奈は着地すると間髪入れず、落下したクリーチャーへ走っていった。

「はあっ！」

横払い…斬り下ろしと二体のクリーチャーを両断する瑠奈。

「レオン、あと何体？」

「はあ？」

「あんたが逃げてきた時に追ってきたクリーチャーは、あと何体？」

「あ、ああ…八匹いやがって、内二匹は撃ち殺したから…。」

「今、二体倒したから…残るは四体か。」

痙攣しているクリーチャーの頭を踏み潰すと…瑠奈は封魔を払って血を落とし、鞘に刃を納めた。

「和傘…。」

先程、八坂神社で拝借した和傘をさして歩いていく瑠奈。

「瑠奈っ！」

「レオン…あんたは、この場で待機。」

「た、待機だあ！？冗談じゃねえ！俺はまだやれ…！？」

レオンが叫ぶなか、瑠奈はゆっくり振り返ると…彼の自動小銃を指差した。

「クリーチャーにやられて使えないんでしょう？それ…。」

「うっ…。」

「大丈夫よ…あとは、私がやるわ。」

瑠奈がそう告げて去っていくと…レオンは苦笑いしながら、頭を掻いた。

「参ったな…全てお見通しかよっ。」

一人、新橋通りを歩いていく瑠奈。

「…。」

そんな彼女を追うように…クリーチャーの影が気配を殺して、彼女の背後から近づいていた。

「…来た。」

立ち止まり…瑠奈は傘を上へ放り投げると同時に廻し蹴りを放つと、背後から走ってきたクリーチャーの顔面に命中して雨で濡れた地面を滑っていった。

「グアアッ！」

家屋の壁を突き破って襲いかかるクリーチャーに、封魔の鞘で殴りかかる瑠奈。

『瑠奈、屋根から二体。』

「!…はあぁっ!」

クリーチャーを殴りつけた格好のまま…瑠奈は鞘から封魔を抜いて、抜刀斬りを放った。

「はぁ!」

抜刀斬りで一体を両断するも、もう一体の爪が瑠奈に迫る。

「!…くっ。」

バンツ!

瑠奈が目を閉じた瞬間…クリーチャーは、こめかみを撃ち抜かれて地面に倒れた。

「!？」

「瑠奈っ!大丈夫か!」

鞘で殴りつけたクリーチャーを両断した後、封魔を払った瑠奈へレオンが駆け寄った。

「レオン、あんた…。」

「こちら、元・軍人だ。小銃がやられた時の準備くれえしてるぜつ。」

拳銃を構えてレオンが笑う。

「ふっ…借り、作っちゃったわね。」

「よりもよって、俺に…てか？」

「ん？…そうね。」

瑠奈は微かに微笑むと、レオンは苦笑いを浮かべた。レオンが後ろに振り返って拳銃を連射すると、頭と胸に弾を数発浴びてクリーチャーが倒れた。

「あと…。」

「…一体。」

瑠奈は血に染まった封魔を払い、クリーチャーと睨みあった。

雨が封魔と瑠奈を濡らす…。

「グアアアッ！」

走ってくるクリーチャーに対し…身構えず、そのままの態勢で待つ瑠奈。

「…はっ！」

瑠奈はすれ違いざまに封魔を振り下ろすと…クリーチャーは斜めに両断され、真つ二つになった。

「終わりか…。」

「この辺りは、ね…リイナ！」

《はい、先輩！》

上空で旋回中のヘリにいるリイナへ、通信を送る瑠奈。

「八坂神社に着陸出来る？封魔のエネルギー補充と…私の隣にいる馬鹿へ、予備の自動小銃を。」

「瑠奈…。」

《了解しました。》

「サンキュ。」

「あんたも一応…隊の戦力だから。」

「そうかい。」

レオンは微笑むと和傘をさして…雨で濡れた瑠奈に歩み寄った。

「濡れちゃったし…もう必要ない。」

「そう言うなって。俺達の大事な隊長様に、風邪などひかれては困

りますっ。」

「ふっ…お調子者。」

瑠奈はレオンにそう呟くと…苦笑いしながら傘に入っ、一緒に歩いていった。

「もう少し愛想が良けりゃあモテるだろうによぉ？」

「あんたに言われたくない…。」

「か、可愛くねえ…。」

「…。」

「ん？もう来てんのか。」

「みたいね…。」

瑠奈とレオンの二人が八坂神社に到着すると…既に着陸していたヘリからリイナが顔を出した。

「先輩…！」

「…リイナ。」

「ふふふ、お二人共々！雨、もう上がってますよー！」

「ん？…おっ、マジだ。」

レオンが空を見上げると、雨雲の隙間から綺麗な青空が覗いていた。

「じゃあ、傘をさす必要は無くなったわね？…レオン、あのお店に返ってきて。」

「へえへえ！」

苦笑いしながら壊れた売店へ走っていくレオンを、笑顔で見つめる
瑠奈。

「リイナ、ヘリを出すわよ。」

「了解ですつ。」

「！…ちよつ、おいてく気がよっ！おいっ！」

慌てて走ってくるレオンを尻目に、瑠奈は笑っているリイナと共に
ヘリへ乗り込んだ。

井上瑠奈

飛行中のヘリ内にて…リイナが簡易点検装置を使い、封魔のメンテナンスを始めた。

「レオン、あなたは周囲の警戒。」

「了解。」

「ウインは、グラスハイムが近づいてきたら教えて。」

「了解ッス！」

封魔が収納されている簡易点検装置のキーボードを、リイナは慣れた手つきで操作し…装置を起動させた。

瑠奈はリイナの後ろで、腕組みをしながら立っている。

「…どう？」

「エネルギー補充はすぐに済みますが…ちょっと整備が必要みたいです。」

リイナがモニターを指差した。

「回路の一部に異常を見つけました。グラスハイムでしっかり見た方が良さそうです。」

「そう…分かったわ。」

ヘリが東京に向かい…プロペラを勢いよく回転させながら飛んでいく。

「よう、いっしょとー！」

レオンは椅子に座るともたれ掛かって、背伸びをした。

瑠奈も椅子に座ると、封魔を点検中のリイナに話しかけた。

「リイナ。」

「はい？」

「グラスハイムに着くまで仮眠をとるわ…着いたら起こしてくれる？」

「了解しましたっ、ごゆっくり。」

瑠奈は脚を組むと、静かに目を閉じた。

そんな瑠奈を見つめながら…レオンは静かに、リイナの所へ向かった。

「寝顔だけ見てるとよお…普通の女の子なだけだなあ？」

「だよな？…けど、【あの事件】以降…先輩はあんなっちゃったの。」

「あの事件？」

「レオン、知らないんだ…。」

「ん？」

「先輩…クリーチャーが日本へ攻めてきた時、目の前で友達を殺されたの。」

「なっ！…マジかよ？」

リイナはモニターを睨みながら頷いた。

「うん…目の前で友達がクリーチャーに噛み殺された後、体をバラバラにされたらしいよ…。」

「よく助かったな？…あいつ。」

「先輩が襲われた時…たまたま近くで戦闘していたバラン司令が見つけて助けたらしいの。でも、それ以来…先輩の心は閉ざされたまま。」

「そうか…。」

レオンとリイナは眠っている瑠奈を見つめ…黙り込んだ。

「先輩は…親しい友達を守れなかった罪に苛まれてるんじゃないかな。だから、誰とも仲良くしないんだと思う…失うのが怖いから。」

「けど…俺にゃあ、ただの現実逃避にしかみえねえぜ？」

「レオン…世の中には、貴方みたいに心の強い人間ばかりいるわけじゃない…。」

「…まあ、な。」

「…。」

夕暮れ時となり…ヘリは明かりの見えない地上を見下ろしながら、東へと飛んでいった。

暫くすると…街の輝きが見えてきた。

「グラスハイムまで、あと少しか。」

「先輩、起こしてくる。」

「ああ。ぜい肉君、安全運転で頼むぜっ？」

「その呼び名、嫌いッス！」

三人が話しをしているなか…瑠奈は脂汗をかきながら、うなされていた。

「うう…。」

「助けてって言ったのに…。」

「か、佳苗…。」

「見殺しにするなんて…。」

「見殺し…なんか。」

暗闇の中…血みどろになった親友の佳苗が、瑠奈にゆっくり歩み寄ってくる。

「なんで、助けられなかったの？あんなだけのうのうと生きて…恨めしい。」

「ち、違う…私だって…私だって、佳苗を助けたかった！」

佳苗は瑠奈の肩を掴むと…耳元で囁いた。

「この…人殺しっ！」

「！…ち、違うっ！！私は人殺しなんかじゃないっ！」

「…きゃあっ！」

瑠奈が叫びながら飛び起きると…リイナは驚いて、尻餅をついた。

「はあ…はあ…ご、ごめんなさい？リイナ。」

「せ、先輩…大丈夫ですか？だいぶ、うなされてましたけど…。」

「平気…それより、もうグラスハイム？」

「はい。」

「了解、ありがとう。」

瑠奈は外を眺めると…グラスハイムのメインビルがライトで照らされていた。

「ウィン、着陸態勢。」

「了解ッス！」

瑠奈がウィンに指示をすると、レオンが心配そうな表情で歩いてきた。

「瑠奈…本当に大丈夫か？」

「レオン？…大丈夫って、言っているでしょう。」

瑠奈は俯くと悲しい眼差しをしていた。

グラスハイムのヘリポートで、誘導員がヘリに合図を送る。

「…よし！着陸したッス。」

「お疲れ様…皆、次の命令があるまで待機。」

「先輩、封魔を。」

リイナから封魔を受け取ると、瑠奈は腰に差した。

「ありがとう…私は研究室に行くわ。何かあったら、携帯が研究室に連絡を。」

「了解！」

瑠奈はヘリポートを後にすると、グラスハイムのメインビル内にあるエレベーターで…地下の研究区画へ向かった。

瑠奈はエレベーターを降り、通路を歩いていくと…研究室前へやって来た。

「失礼します。」

「ん？瑠奈じゃないの…元気そうで何よりね。」

瑠奈が室内に入ると、白衣を着た三十代の女性が優しく微笑んで迎えてくれた。彼女の名は、和田玲子。

グラスハイム研究室の研究室長を務めており、封魔のメンテナンスも担当している。

「和田教授…封魔のメンテナンス、良いですか？」

「構わないわ？座ってなさい。」

「はい。」

和田教授に封魔を手渡すと、瑠奈は近くにあったソファアに座った。

「瑠奈？シグナル隊長が心配していたわよ。」

「また…ですか。」

呆れた表情で俯く瑠奈を見て、和田教授は苦笑いしながら話を続けた。

「歳も近いし、心配なのよ？お姉さま肌だしね。」

「私には、お高いお嬢様のようにしか見えません…。」

「ふふふっ、またすぐそういう意地悪をつ…ん？なるほど…エネルギー供給回路に異常か…リイナちゃん、さすがね？」

「リイナ、ですか？」

瑠奈がキョトンとしながら問いかけると、和田教授はパソコンのモニターを見つめながら頷いた。

「前以て連絡があつたのよ…封魔の回路に異常を発見したって。」

「そうでしたか。」

「リイナちゃん…貴女を姉のように慕ってるみたいだし、優しくしてやりなさいね？」

「…努力します。」

「失礼しますわ？」

和田教授が瑠奈に微笑んでいると、研究室へ用事があつたのか…シグナルが入ってきた。

「シグナルっ、瑠奈も来ているわよ？」

「あ、瑠奈っ。」

「…。」

ジッと、シグナルを見つめる瑠奈。

「どうしたの？何かあった？」

「な…何でもない。」

「ふふふ、恥ずかしいのよ。」

「ち、違いますっ…！」

赤面しながら慌てる瑠奈を見て、シグナルは優しく微笑んだ。

「良かった、無事で…心配してたんだから。」

「あ、ありが…とう。」

「えっ…。」

「あらっ。」

笑顔で見つめ合うシグナルと和田教授を見て、瑠奈は首を傾げた。

「？…和田教授、何か。」

「何でもないわ…ねえ？」

「ええっ！」

「な…何なんですっ？わ、私だってお礼くらい言います。」

「ふふふっ！」

「瑠奈！今、一階にある喫茶店のケーキが女性隊員の中で評判なの！一緒に食べ行かない？」

「ケーキ？…わ、私はちよっと。」

「行つてきなさいな？封魔のメンテナンスは、まだ時間かかるから。」

「は…はあ…。」

「瑠奈っ、早く早く！」

「ちよっ…ちよっと！シグナル、手…引つ張らないで！」

シグナルが嬉しそうに笑いながら瑠奈の手を掴み、走って研究室を出ていった。和田教授はそんな二人を見て微笑むと、再びパソコンのモニターを見つめた。

「やれやれ…瑠奈も、もう少し心を開いてくれれば良いんだけど。」

教授がキーボードを操作していると、モニターを見て…眉をピクツと動かした。

「何？…このシークレットは。」

和田教授は突如画面上に現れたデータを調べていくと…0と1の数式が画面一杯に現れた後に、見たこともない景色や見知らぬ人物が次々にモニターへ映し出された。

「な…何なの。」

慌ててキーボードを操作する和田教授。

「操作不能？…な、何が起きているの。」

暫くすると…画面は光りを放ち、一人の女性が画面上に姿を現した。

「だ、誰…。」

教授はモニターの女性を見つめ…啞然としていた。

《天之女神…それは、日本神話に語られる事がなかった幻の女神。》
あまのめがみ

「天之女神？…封魔にはまだまだ沢山の謎がありそうね？…え？」

頷いていた教授がふとモニターを見ると…画面上には【井上瑠奈】と、瑠奈の名が表示されていた。

「瑠奈？そういえば…どうして当時BASTARに入隊していなかった彼女を、封魔が使い手に選んだのか…そこから謎を解いていかなくってはならないみたいね。」

和田教授が腕組みをして考え始めた頃…瑠奈はシグナルに連れられ、一階にある喫茶店の前でメニューを見つめていた。

「瑠奈、これよこれ！」

「?…このケーキが？」

「そう！女性隊員の中で噂になってるのよ！」

「よく…わからない。」

瑠奈が俯くと苦笑いするシグナルの後ろへ、雑用を終えたリイナが笑顔で歩み寄った。

「シグナル隊長っ…あ、先輩も！珍しいですねっ？」

「リイナ、あなたもケーキ目当て？」

「はいっ、先輩達もですか？」

「!…そうなの、一緒に食べましょ？奢るわよっ。」

「えっ、本当ですかっ！じゃあ…ご一緒させていただきま〜す！」

喜ぶリイナを見ながら、シグナルは笑顔で振り返った。

「瑠奈…もう逃げられないわよ？」

「はあ…もう、好きにして。」

溜め息をついた瑠奈を見て、シグナルとリイナは笑顔でハイタッチした。

「ん？…あ！さては、最初から仕組んでいたのねっ！？」

「まあまあ！」

「先輩、とにかく入りましょう！」

「ちよっ…リイナ！？シグナルまで！」

シグナルとリイナに両脇から腕を組まれ、無理矢理喫茶店へ連れ込まれる瑠奈だった。一方…和田教授は、封魔の宝玉から直接データをパソコンへ移す作業を行っていた。

「対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】…製造元、国連特殊兵器開発局。設計・開発責任者…！…アリナ・イノウエ！？」

和田玲子教授がパソコンのモニターを見て驚き、思わず立ち上がった。

「瑠奈の…母親だったの？亜里奈…。」

《井上亜里奈…彼女に封魔を任せるわけにはいかない。》

「また…。」

和田教授は画面上に再び現れた女性を、ジッと見つめた。

「貴女は…誰なの。」

《そんな事より、封魔の能力向上及び機能を説明します…。》

画面上の女性がそう和田教授へ告げると画面が切り替わり…封魔の図面が現れた。

「封魔の可変機能？…太刀型可変形態【正宗】に薙刀型可変形態【青龍】、大剣型可変形態【あまのむらくも天村雲】の…全3種へ変形が可能。」

教授は目を閉じて考えると…暫くして、ゆっくり瞳を開いた。

「これを知れば…国連やB A S T A R本部N o aの研究機関は、きっと封魔のデータを欲しがるわね。だけど…。」

キーボードに手を伸ばす教授。

「瑠奈の身に危険を及ぼしたくないわ…あの娘の身を守るには。」

和田教授が呟いていると…封魔の宝玉が淡い光りを放ち始めた。

「？…封魔…。」

『瑠奈は…私が守ります。』

「！…封魔！？」

喫茶店にいた瑠奈が慌てて立ち上がると、シグナルとリイナがキョトンとしながら瑠奈を見た。

「ど、どうしたの？急に。」

「美味しいですよ？」

「ごめん、封魔が…私を呼んでる。」

「え？」

「私を探してる…早く行かなきゃ！」

瑠奈が慌てて走っていくと、シグナルは立ち上がって彼女へ叫んだ。

「瑠奈！ちよつと、このケーキはっ！？」

「あげるっ！」

「あ、あげるって…。」

「じゃあ、私が〜！」

瑠奈のケーキにフォークを伸ばすリイナ。

すると、シグナルも自分のフォークを瑠奈のケーキへ伸ばした。

「むっ！」

「んっ！」

二人がケーキを間に挟んで睨み合っているなか…瑠奈はエレベーターから飛び出るや、研究室に慌てて駆け込んだ。

「…教授っ！」

「瑠奈っ！…どうしたのっ？血相変えて！」

息を切らす瑠奈に、慌てて駆け寄る和田教授。

「ふ、封魔が…私を呼んでいる気がして。」

『瑠奈。』

「封魔！」

瑠奈はメンテナンス機器から取り出された封魔を手にとると、力一杯抱きしめた。

「封魔…教授によく診てもらった？」

『はい。いつでも戦闘可能です。』

「良かった…。」

瑠奈が封魔を見て、微笑んでいると…和田教授が白衣のポケットに手を入れて歩み寄った。

「封魔をちょっとだけ、バージョンアップさせてあるわ？」

「バージョンアップ？」

瑠奈が振り返って問いかけると、和田教授は苦笑いしながら頷いた。

「そうっ。まあ…正確に言うと、封魔が自分でバージョンアップし

ただけど。」

「！…封魔が？」

「私も驚いているわ？…意思を持ち、使い手と共に成長する武器なんて。本当にNoaで開発されたのかしら？…明らかにオーバーテクノロジーよ。」

「封魔…。」

瑠奈は封魔を見つめ、黙り込むと…和田教授に頷いた。

「大丈夫です。私は封魔を…信じているから。」

「瑠奈…。」

和田教授は微笑むと、封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈？…真面目な会話をしているなか、恐縮なのですが。』

「何？…遠慮なんて、封魔らしくない。」

『…口に、クリームがついています。』

「えっ！？…あ、これはその…慌ててたからよっ。」

赤面しながら口を拭く瑠奈を見て、和田教授は思わず笑みを溢した。

「ふふふっ！息もあってるし、心配ないかしらね？」

「え…はい、頑張ります。」

瑠奈は右手に握る封魔を見つめ…優しく微笑むと、そんな瑠奈の笑顔に心えるように封魔の宝玉は光り輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971z/>

天之女神-討魔伝記～BASTAR・闇を狩る者～

2011年12月10日17時50分発行